



Title	ル・クレジオにおける小説世界：個人の危機から文明の危機へ [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	櫻井, 典夫
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11593号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/57739">http://hdl.handle.net/2115/57739</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Norio_Sakurai_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 櫻井典夫

審査委員  
主査 教授 佐藤淳二  
副査 教授 押野武志  
副査 准教授 竹内修一  
副査 准教授 鈴木雅生

（学習院大学文学部）

## 学位論文題名

ル・クレジオにおける小説世界——個人の危機から文明の危機へ

本論文は、個人的な危機に陥っていた若きル・クレジオが異文化との遭遇から「治癒」の道を進むことを跡づけ、一種の「回心」を描き出している。聖パウロや聖アウグスティヌスの例を多かれ少なかれモデルとして、欧米ではこれまで夥しい数の文学者が「回心」ともいえる人生上の大転換を書き記してきたが、いうまでもなくそのほぼ全てが広い意味でキリスト教文化圏内部での「回心」に留まってきた。しかるに、ル・クレジオの「インディオ体験」による転回は、「回心」といっても脱中心的な旋回運動であり、キリスト教のみならず、ヨーロッパ中心主義からの離脱を含意するものであるといえよう。ル・クレジオの小説世界が、諸文明・文化の統合化、中心化、全体化を志向することなく、あくまで接続的、脱中心的、横断的に諸文明の「あわい」に敢えて入りこむという意味で、極めて顕著な現代性・同時代性を示していること、これを明らかにした本論文の意義は大きいと評価できる。ル・クレジオにとって「インディオ体験」とそれによる小説世界の構築は、「狂気」という危機を自ら治癒克服する過程であるとともに、それを超えて、文化的次元での一種の「シャーマン」となるという象徴的イニシエーションのプロセスをも含んでいたのである。言い換えれば、インディオ文化との遭遇から「呪術的思考」すなわち異なるシンボルの操作法を共有することで個人の危機を脱したル・クレジオは、「合理的思考」をその本質として発展・繁栄を遂げた現代文明の危機を論ずる作家へと変貌していったのである。この本論文の結論は、現代フランス文学研究の枠にとどまらず、広く現代文学研究全般・現代文化論にも少なからぬインパクトを与えるものと期待できるであろう。ちなみに、本論文の成果の一部は、すでに雑誌掲載論文や全国学会での口頭発表などで公表されており、一

定の評価を得ているものである。

このように重要な成果を挙げた本論文であるが、問題意識の壮大さに対して、個々の引用文の細部における解釈にやや強引な点が見られるなど、解釈技法とその慎重な適用という面から改善すべき点があることが指摘された。また、哲学や人類学、精神医学にまで理論的支柱を求めたために、いささか論点が拡散した箇所があるとの指摘もあった。しかしながら、これらはいずれも櫻井氏が現時点では十分に自覚している点であり、今後の研鑽と考察によって日ならずして解決されると期待されることから、本論文全体の評価を損なうものではないと判断される。

以上、申請論文の審査と口頭試問の結果にもとづき、本審査委員会では、全員一致して、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。